# 文化としてのバラ

野村和子（バラ文化研究所副理事長・
千葉市花の美術館みどりの相談員）

**私とバラ**

私がバラを始めたのはそれほど昔からではない。

園芸科の学生時代、アレンジメントとバラの栽培を専攻する人がいちばん多かった。反骨精神旺盛だった私は、あえてどちらも選ばずに、誰も見向かなかった花をテーマにしたのだった。

その私をバラに向けさせたのは、夫の会社の社宅の所在地である。たまたま近くにあった京成バラ園芸の研究所でバラの育種家として高名な鈴木省三がバラの本の出版を手伝う人を探している、という情報をくれたのも、園芸科の友人だった。バラの本の出版の手伝いということから始まったバラとの、そして鈴木省三との付き合いは現在20年を超える。鈴木氏の手足となって働いた10数年間の、黒子としての装束を解いて動き始めたのはバラ文化研究所を興してからである。言ってみれば鈴木氏の下にいた10数年は土台作り、今は葉を展開し、1枚ずつ花びらをおろしているところ、といえるだろうか。いずれにしても、しばらくは「バラ」から足を抜けなくなってしまったことには間違いがなさそうである。

このバラという植物、踏み込んでみるとまるで底なし沼のごとく奥が深い。

大体、バラの原種は花びら5枚のシンプルな花である。それが長い年月をかけて、現在のようなバラに発展してきている。その事実ひとつをとってみてもその歴史が単純なものでないことは想像に難くない。しかもそれ

は人の歴史と切っても切れない関係があるのである。

長い年月、人の歴史、文化に関わりをもち、園芸文化の先端に位置していたバラがどのような変遷を辿ってきたかを探ってみよう。

**バラという植物**

バラという植物は地球上で北半球にのみ自生するもので、その数はおよそ120種、それらすべてが現在のバラに発展してきたわけではなくて、それらのうち10数種が係わってきたものと考えられている。

前述したようにバラの基本形は花びらは５枚である。が、花びらに変化しやすい雄しべの数が多いために、自然界でも八重咲きのバラが出来やすい条件は整っていたといえるだろう。それに加えて香りのよいものが多く、花も比較的大きいものが多いことから、野生状態であってもかなり目立つ存在ではあったものと考えられる。

**バラと歴史**

歴史的文献の多く残されているギリシャ時代にすでにバラの存在が意識されていたことが窺える。

紀元前1500年ころのギリシア・クレタ島のクノッソス宮殿の遺跡から発見されたフレスコ画にはバラと思われる花が描かれている。

またホメロスの叙事詩「イリアス」ではバラの香料についての記述がみえる。これは紀元前900年頃とも800年頃ともいわれる。その後時代を追って、抒情詩人がバラを謳い上げている。サッフォーやアナクレオンは有名なところだが、ずっと時代が新しくなり、紀元前１世紀頃のギリシャの生活がいきいきと表されている詩を紹介しよう。

> 市場へでかけてね、デーメートリオス、
> アミュンタースの店でいわしを３匹もらへ、それと小あじを10匹ばかり、
> それから芝えびを24匹・・・あいつが勘定してくれるだろ・・・

帰りにアミュンタースの店でバラの花環を６つほど買って
そいからと・・・帰りに寄ってトリュフェラアをすぐに、と呼ぶ
んだ

アスクレピアデース
呉　茂一訳

当時中流（おそらく）階級の生活がいきいきと表されていないだろうか。しかも当時お客を招ぶのにバラの花環を用意する習慣があったことがわかる。予約しなくても６つもの花環がすぐに買えるということはそれだけ需要があり、しかも栽培技術があるからこそ常時販売して、需要に応えられるのだといえるだろう。

こんな詩ひとつからも当時バラがどういう使い方をされたか、ひいてはそういう使い方をするためにはかなりの栽培技術があったことまでもが推定できる。

図１　ヴィーナスの誕生

ローマの時代に入るとバラは特殊階級のものとなり、王侯貴族は毎夜バラの花びらに埋もれて宴会をしたといわれる。皇帝ヘリオガバルスの時代になるとそうしたバラの乱用は頂点に達し、その様子は後世アルマタデマという人によって「ヘリオガバルスのバラ」と題して描かれている。この頃「バラに伏す」というと贅沢な暮らしを意味したとさえいわれる。

その後ローマが衰退の道をたどり、キリスト教が台頭するに及び、教会中心の規制された世の中になり、バラも修道院のなかでのみ栽培されたといわれる。こうした束縛を解かれたのがルネッサンスである。それまでは絵画もキリスト教に題材をとったものがほとんどであったものが、ルネッサンスではギリシアの時代に帰って自由な表現を、ということで、「ヴィーナスの誕生」や「春」が描かれるのである。

この絵画にちりばめられたバラをみると、オールドローズの原点となったガリカローズ、ダマスクローズ、アルバローズが描かれているように見える。これらのバラがおそらくギリシア・ローマの時代から中世ひいては近世にいたるまでも延々と引き継がれてきたのであろう。

これらのバラは南ヨーロッパから小アジアにかけて自生するガリカローズを基本として、小アジア、西アジアなどにあったバラが自然に交配されてできてきたものである。

紀元前から18世紀まで延々たったの4種？と思わないでもないが、これは18世紀末（？）のアルフォンス・カールの言葉によっても証明される。「ルイ14世の時代（17世紀後半）には4種のバラしか知られていなかった・・・」

16世紀後半の英国のバラ戦争で紋章とされたといわれるランカスター家の赤バラはガリカローズ、ヨーク家の白バラはアルバローズであるとされている。これらのバラは古くローマ軍の侵略により英国にもたらされたものであるとか、また白バラは国境を越えた婚姻によりフランスよりもたらされたともいわれるが、いづれにしても基本の4種のうちのものであったのだろう。このヨーク家とランカスター家両家の王位継承を争う30年にも及ぶ戦争はヘンリー七世がヨーク家から妃を迎えることで決着がつき、新

しくチューダー朝を興す。そして赤バラと白バラを重ねた図柄をチユーダーローズとしてその紋章としたのである。

こうしてガリカローズとアルバローズは英国においてもある意味では時代の主役であったといえるだろう。

図２　チューダー朝の紋章

４種のひとつ、ケンティフォリアローズだけがいままで言及してきていないが、これはガリカ、ダマスク、アルバに比べるとかなり遅れて16世紀ころに出現したのではないかと考えられている。が、花弁の多さ、大きさ、香り、優雅な花容などから注目を集め、16～18世紀には「画家のバラ」といわれるほど、画家たちは競ってこの花を描いたという。19世紀のはじめに「バラ図譜」を出版したルドゥテも冒頭にこの花を取り上げている。

16世紀ころにケンティフォリアが現れ、18世紀には中国から四季咲き性のあるバラが導入され、19世紀に入ってすぐのナポレオン妃ジョセフィーヌの登場により、バラ改良のフィールドが固まったといえる。そこへ日本からは房咲き性の丈夫なノイバラが紹介され、急速にバラは近代化の道をたどるようになる。

図３　ケンティフォリア

こうして相互交配によりポートランド系、ブルボン系、ハイブリッドパーペチュアル系などが登場し、ガリカ、アルバなどそれぞれの改良も進み、現在オールドローズと呼ばれるものが大量に世の中に現れてくる。これは多くが19世紀の中期以降のことになる。これらの中から病虫害や栽培技術などさまざまな障害を乗り越えてきたものが、現在私たちがオールドローズとして親しん

でいるものとなるのである。

それでは、バラの発祥の地といっても過言でない中東地区におけるバラはその後どういう歴史をたどったのだろうか。残念ながら、具体的な文献はあまり知らない。

おそらく紀元前のアレキサンダー大王の遠征やペルシアをはじめイスラム圏の侵略、攻防などでヨーロッパ等にバラがもたらされたと考えられる。8世紀ころに書かれたといわれる「千夜一夜物語」にはバラはかなり登場する。また11世紀に書かれたオマル・ハイヤームの四行詩ルバイヤートにもバラはナイチンゲールとともにうるわしいものの代表のごとく歌われている。

15世紀のオスマン帝国の7代スルタンであるメフメト2世はビザンティン帝国を滅亡させたことでも有名で、その肖像画は今まで見ただけでも3点あるが、そのどれもがバラの花を嗅いでいる。おそらくバラのふるさとともいえる中東地区でも当然バラはその歴史にかかわってきたと思われるのだが、いまのところ明確にできないのが残念である。

図4　メフメト2世

**日本におけるバラ**

日本の歴史に現れたバラといえば、万葉集に歌われたノイバラ、そして常陸国風土記に記録され、それが「茨城」という語源にもなった茨が古いものだろう。平安時代になるとすでに中国から四季咲き性のバラがもたらされ、「さうひ」「長春花」などという名で源氏物語や枕草子、明月記などに書かれている。

園芸文化の盛んであった江戸時代にはいくつかの種類のバラがあったようで、その中にはオランダを通してはいってきたと思われる「らうざ」「をらんだいばら」「ぼたんばら」などといったものがみられる。

明治維新で外国との交流が再開されるとバラもたくさん日本に入ってくる。それらはみな日本名をつけられて広まった。すなわち、ラ・フランスは「天地開」、スーヴニール・ド・ラ・マルメゾンは「世界図」、デュシェス・ド・ブラバンは「桜鏡」といった具合である。そしてさらにバラの番付表が発表されるほどバラ熱は高まったのである。

**バラは文化的遺産**

こうしてみてくると、冒頭でも述べたように、バラの歴史を語るとき、それは決して人の歴史と無縁ではないのがよく分かる。人の歴史を見続け、時には表舞台に立ち、さらには歴史を左右さえもしてきたバラ、これらを、私たちは今、オールドローズと呼ぶ。その後更に改良されて、現在多くのバラ園や花店で見る、色鮮やかで、厚手の花びら、シャープな花形の現代バラ（モダンローズ）に対してである。言ってみればオールドローズはモダンローズに至る改良の過程にあったバラである。他の花であれば、残されていないケースがほとんどであろう。そのオールドローズが、今また注目されている。それはオールドローズの価値を認め、大切に守ってきた方々のお陰であることはいうまでもないことであるが、他の追随を許さないほどに自己主張をしているモダンローズに対して、それら新しいバラを追求していく蔭で忘れ去られてしまった、やさしさ、はかなさ、香りのよさを持っているからではないだろうか。そしてバラが担ってきた歴史との深い係わりにもよるのではないだろうか。さらに、まだまだ追求していかなければならない未知の世界が広がる奥の深さにも因るものと思われる。今、欧米人はオールドローズをヘリテイジローズと呼ぶ。文化的遺産のバラ、そうなのだ、オールドローズは今や古いだけのバラではない、改良の過程上にあっただけのバラではない。人類にとっての大切な遺産となっているのである。

もう一つ考えられること、それはイングリッシュガーデンにおける利用価値の高さにもよるのではないだろうか。やや、下火になったとはいえ、イングリッシュガーデンに憧れる人は多い。確かに気候も土壌も異なる英

国をそのまま真似することは難しい。が、日本の庭園と英国の庭園とは、大きな共通点があるように感じられる。それは自然の風景を取り入れている、という点に於いてである。

日本の場合は風景を凝縮させて洗練させたものといえるのではないだろうか。そして英国の場合は風景をそのまま取り入れてそれを洗練させたもの、といっていいように思われる。その辺りはフランスやイタリアの造形的なものとは大きく異なる。おそらく意識の根底に共感できるものがあるからだろう。

そうしたイングリッシュガーデンにおいてはオールドローズが不可欠の存在となる。他の草花とも語らいながら一体となってナチュラルなガーデンを仕上げていってくれるからである。よいものはよいものとして認めて、いかに取り入れるかを追求する姿勢が大切なのではないだろうか。

その一方では究極のバラの追求も止むことはないだろう。青いバラを求めて、薬の全く要らないバラを求めて、街路樹になるバラを求めて・・・・・

バラを追求しようと思ったとき、それは園芸学や植物学に浸らなければならず、世界史に通じなければならず、化学・生物学にも精通しなければならず、各国語も必要となり、絵画・音楽とも無縁ではいられず、まさに園芸文化いや文化の真髄であるといえるだろう。

私？ 呆然と眺めているだけで、まだかじってもいないのが、実情ではある。